

八月三十日に削除されたブログ

星槎高校 2年 石井 健琉

三年前の今日、レーサーの嶋岡彰選手が世界大会で事故に遭い死亡した。

レースの後半、独走状態だった彼の世界記録を大幅に超える走りに、誰もが新たな伝説の誕生を期待した。

しかし、最後のコーナーを曲がる際に彼の車はコーナーを突きぬけ、壁に激突、彼はまもなく死亡した。

この事故は様々な憶測を呼び、マシンの開発段階に不備があったのか、調整をしていた整備士に責任があるのか、はたまた無茶な運転をした本人に責任があるのかなど、様々な意見が飛び交った。

結果、事前の検査では、車体に問題はなく、嶋岡選手のミスであったと結論づけた。そして彼は伝説と呼ばれるようになった。

ここまでする読者の方々の知ることの事故のおおよその概要であろう。

しかしこの事故には、不審な点が三つ挙げられる。

まず一つ、大会前のSNSの投稿だ。

嶋岡選手は皆さん知っての通り、かなりのSNS好きで、特に大会前になると、練習の様子や、直前の心持ちまで、あたふたと絶え間なく投稿することでファンの間では知られていた。

それなのにあの世界大会の直前には、

『伝説になってきます』

と、レース当日の朝に投稿したのみであった。

二つ目は、遺族によって公開された嶋岡選手の日記だ。

そこに記されている格言や日々の苦悩などに注目が集まりがちだが、さらに注目すべきは『伝説』という言葉が出てくる頻度の多さだろう。先程のSNSの件にも通ずるが、彼はこの言葉に取り憑かれていたのではないだろうか。

三つ目は現在の彼の評判だ。

同じレーサーや、レーサーを目指す若者に話を聞くと、皆、口を揃えて、

「あのままゴールしていたら何秒だったのかと思うと恐ろしくなる。」

という趣旨の話を必ずする。

この三つの点を合わせて考えると、ひとつの乱暴な憶測が立てられる。

それは、彼は故意に事故にあったのではないか。という説だ。

彼は練習の段階できっと世界記録を大幅に超える走りを見せていたのだろう。そしてその走りを本番でも見せられれば悲願の伝説になれるという確信もあったはずだ。

しかし、ここで悪魔が囁く。

「だけでもし自分を超える記録を出す者が出てきたら？」

彼が先人から伝説の称号を奪い取るように、彼もまた、遅かれ早かれ奪われるかもしれないのだ。

そうして一つの方法を思いつく。

自分で事故を起こし、タイムをやむやにしてしまう。そうすればきっと後年の人は他の人が記録を塗り替えた時にこう言うだろう。

「でも嶋岡さんがあのまま無事に走りきっていたら、もっと速かったかもしれない」
それならば自分は伝説を誰にも譲らずに済む。

そうして彼は計画を実行した。

この恐ろしい計画は、何の滞りもなく達成され、彼の栄光だけが残った。

彼は最終コーナーを曲がる時、一体どんな表情をしていたのだろうか。真剣な顔をしていただろうか。笑っていたのだろうか。それとも悲しんでいたのだろうか。私は考える度にそうした想像すらも嶋岡選手に見透かされていた気がして恐ろしくなる。

以上が、私の故人に対する大変失礼な妄想である。ただの出鱈目だと思っていただけで構わない。

嶋岡彰選手の御冥福を心よりお祈り致します。